

中国との差を感じた 12 日間

西部 優生

はじめに、報告書の内容であるが、以下の 4 つに沿って述べていく。

1. 参加理由
2. 本事業で特に印象に残った具体的な体験。
3. 本事業やプログラムを通して、何を学び、どのような成果を修めたのか。
4. 今後、その成果を事後活動や青少年活動にどのように生かしていきたいか？

1. 私が中国派遣団として参加した理由は二つある。一つ目は、一人でも多くの中国の方に東日本大震災のことを伝え、当時のことや現状を知ってもらうことである。二つ目は若者支援に関して、今中国では何が起きているのかを自分の目で焼き付けてくることである。まず一つ目であるが、私は 2014 年から宮城県気仙沼市にある大島と呼ばれる離島での地域復興活動を行っている。活動内容は、島民の農業の手伝いを始め、島の次世代の方々と意見交換、観光地におけるベンチ作成などである。その中で私は東日本大震災に関して、海外の人たちはどこまで理解しているのか、そしてどう捉えているのかを聞くことが復興への一つのカギではないかと推測した。なぜなら中国は隣国でもあり、日本への年間観光客数も常に上位であるからである。

二つ目であるが、中国の就職は日本よりも厳しいということを耳にしたことがある。私は 2017 年に就職活動を行ったが、面接などから学生の方が企業よりも、立場的に上のように感じた。その背景としては売り手市場であることである。それに対して日本よりも経済成長率が高い中国では、常に就職戦線を勝ち抜くには困難だからこそ、大学選びから人生をかけて選んでいる。その中で就職ができない若者へどんなセーフティネットがあるのか、また就職という道を選ばず起業をした学生も日本よりも多いということを実態を見ていこうと思う。

2. 印象に残った具体的な体験として各都市の学生との意見交換と起業支援の環境設備の視察がある。

まず、学生との意見交換の詳細を述べる。学生と話すことが出来たのは、下記の 4 回である。

- a. 北京大学でのディスカッション
- b. 日中国交正常化 45 周年シンポジウムでの交流会
- c. 貴州省でのホームステイ
- d. 広東省にある中山大学でのディスカッション

上記の 4 つの機会ボランティアについて議論し、その中でも特に印象に残った北京大学とのディスカッションについて述べたいと思う。北京大生は日本語学科の学生ということもあり、言語の壁はなく、日本にも関心を持っている学生とのディスカッションであった。内容はお互いの国の学生のボランティア事情について紹介し合い、そこから議論を深めていく流れであった。日本の学生が行うボランティア活動のスタイルとしては自身の専門分野を始め、興味関心から派生して活動を行っている人が多い。比べて中国の学生の傾向としてはそこに助けが必要であったら活動を行うという学生が多いことが話し合いから分かった。地下鉄の誘導など日本ではボランティアとしていないものも無償で行っている。中国人の気質としては以前一人っ子政策を取っていたこともあり、私の偏見ではあるが、利他性のない人が多いと思っていた。しかし、ボランティアは非常に中国では盛んに行われており、ホスピタリティもある国民性であると感じた。

議論が進んでいく中で私が東日本大震災の話題を持ち掛けると、中国には地震があまり発生しないため、全体的には注目度は低いですが、個人間での関心度が高いということが話し合いから得ることが出来た。前から考えていることであるが、海外観光客向けの震災スタディツアーのようなものがあれば参加したいという声も出ていた。ボランティアというテーマで話しながら、中国のことを知るだけでなく、日本への見られ方も理解することができ、有意義な時間を過ごすことが出来た。

次に起業支援の環境設備の視察に関して、今回訪れた場所と説明を述べていく。

- i. 中関村創業大街…北京。中国のシリコンバレー

とも呼ばれており、多数のスタートアップ IT 企業や研究所が集積されている。ここはスタートアップの会社に対しての場所とノウハウを提供しているところで、多くの起業家を輩出している。国内外の大手企業が出資をしていることから中国全土から優秀な若手が集まっている。カフェで起業家同士の交流することができるワーキングスペースや二階には多くの企業が働いているシェアオフィスがある。また別の建物では外部講師が定期的に、マネタイズや事業グロースの講座など行っており料金はテナント料に含まれている。内装ではスタンフォード大学が発表している様々なアイデアが出やすいような空間デザインなどを取り入れており、最適な環境であると感じた。私たちは、中関村から生まれた有名な会社事例などの説明を聞き、カフェスペースなどを訪れた。

ii. 凱里インターネットパブリックイノベーションパーク…貴州省凱里市。起業家育成、新ビジネスのサポート、人材育成を中心に力を入れている産業促進のために作られた施設である。事業立ち上げのために必要な知識を学び、立ち上げのサポートを受けられるほか、事業立ち上げ後の運用面においても容易に事業運営、拡大が行える環境を提供している。企業数は 160 社でそのうち 3 社が世界進出をしている。テナント料に関しては政府が 3 年間無料で貸し出ししている。

私たちはその中で 6 社訪問し、大学在学中にお茶ビジネスで起業し、昨年の売上が 100 万元を出している方との話も聞くことが出来た。

北京のような都市部だけでなく、少し田舎な地域にも起業家支援の環境があることには驚いた。

iii. 前海深港青年夢工場…前海管理局、深セン青年連合会、香港青年協会により設立された。深セン、香港及び世界中の青年による創業を支援し、青年が創業の夢を実現するための国際的なプラットフォームである。現在 200 社の企業が入っている。優れたアイデアを出せば、それに対して支援してくれるお金と環境が用意されている。テナントが半年無料。私たちは、全体の概要説明を聞いた後、実際に起業した会社の中で、スマートフォンのカメラの追跡技術の特許を持っている会社など 2 社を訪問し、設備

等の充実さを実感した。

3. 学んだことは偏見を持たず、物事をフラットな状態で見ることそしてありのまま落とし込むことである。

今回の中国派遣の前後で私の中国に対するイメージは全く異なる。北京、上海のような沿海部は発展著しいが、内陸部はまだまだ発展途上であり、貧富の差があるのではないかと想定していた。しかし、実際に足を踏み入れてみて、内陸部の都市開発のスピードが非常に速いと感じた。貴州省の一番栄えているエリアは私が住んでいる名古屋市をはるかに超える規模感である。凱里市でも未来城コミュニティの見学の際に外部から人が流入できるようなシステムやサービスがあり、地方のコミュニティ形成に関して衰退地域がある日本では非常に参考になる。また企業全体に関して、今までは設備のようなハード面では非常に強い中国であったが、訪問した企業や起業支援の多くが口をそろえていった環境や人材育成のようなソフト面にも力を入れてきていることを感じた。したがって、従来中国の製品はコスト安、クオリティ低であった。現在は、コスト安、クオリティは日本とさほど変わらないのではないか。そのようになると日本企業は苦戦を強いられるので、真の技術力を発揮する必要があると考える。

成果としてはこれから中国の未来を担う優秀な学生と繋がれたことである。彼らは激動激しい中国社会を生き抜いているからこそ、これからの時代に何が必要なのか、それに向けて行動をしている彼らは私にとってロールモデルのような存在である。また彼らはすごく日本に対して敬意を払っており、圧倒的に中国学生との差を感じた。

4. 私は将来、社会的価値のある会社を起業し、一人でも多くの人を幸せにしたい。なぜなら、私は人のために尽力することが自身のやりがいでもあり、幸福度に繋がるからである。しかし、現在の私は人を幸せにすることができる力量がない。そのためまずは自身の経験を多く積むことが必要である。多くの人と会い、その人の価値観を受け入れ、どのように落とし込んでいくかが大切であると考えている。また来年から企業へのコンサルティングセールスの

職に就くので、現状を受け入れ、企業が幸せになるために自身は何ができるのかを常に考えながら、仕事を行っていく。

その中でも IYEO の様々な活動に精力的に参加しようと思う。それにより新たな人との出会いや当時、中国派遣で感じたことを思い出させてくれる機会になるに違いない。そして様々な方の話でもあるように、今回の派遣では中国の学生との繋がりはまだ最初の一步にしか過ぎず、今後、お互い成長していくために情報収集や意見交換などを通して日中友好の架け橋になる。

最後に、今回非常に充実した派遣を送ることができ、本派遣に携わっていただいた全ての方に感謝の意を忘れず、日々精進することで恩返しをしようと思う。